

# ロマン主義の詩が導く知と社会とは

## John Keats と医科学

後藤 美映

### はじめに

ヨーロッパの19世紀は、16、17世紀の科学革命から誕生する近代科学が、生物学、生理学といった特定の学問分野として専門分化していく時代であるといえる。しかし、その「科学」を意味する *science* という語は、14世紀に英語となるが、もともとラテン語の *scientia* に由来する知識全般を意味していた。したがって、19世紀初期のイギリス・ロマン主義の時代は、知識としてのサイエンスが科学として専門職化する過渡期の時代であったといえる。あるいは、人間や社会に有用であるとみなされつつあった科学に対して詩の意義とは何か、専門化する知の体系に詩がいかに寄与しうるか、を問われた時代であったといえる。このような時代において、ロマン派の詩人らは Sidney や Shelley が「弁明」したように、サイエンスと詩が融合する諸学問の包括的な知の体系を呈示するものが詩であるとみなしたと考えられる。本発表では、こうしたロマン主義文学の横断的知のあり方を特に John Keats の詩を通して考察する。

### 1. 19世紀初期のロマン主義の時代における学問的知識の体系

Keats は、John Hamilton Reynolds へ宛てた1818年5月の手紙の中で、詩、法律、医学といった異なる分野の知識に言及しながら、“Every department of knowledge we see excellent and calculated towards a great whole.”と述べる (*Letters* 1: 276-77)。ここで Keats が言及する「知識」とは、文学、法学、医科学といった学問が完全に別個の専門領域として確立されておらず、その体系がまだ未分化の状況にあった19世紀初頭の時代を背景にして、詩であれ、医学であれ、全てが総合的にまとめ上げられる「統一体」を成す知識全般であると考えられる。

実際、19世紀初期のロマン主義の時代において、学問的知識の体系は、17世紀の Francis Bacon の学問の分類を継承したものであったといえる (伊藤 36)。Bacon の著作 *The Advancement of Learning* が示す学問の分類では、人間の知識は精神能力である記憶、想像、理性の3つの部門に体系化され、「歴史は人間の記憶に、詩は人間の想像力に、哲学は人間の理性に関係がある」とされる (ベーコン 126)。その分類において、後の19世紀後半に自然科学として確立されていく領域となる自然哲学の中で、特に実践の学としての自然学 (フィジックス) が項目として立てられている。しかし、自然学は未だ記述の学問として捉えられており、19世紀初期の時代において知識とは、実証科学の専門領域が確立される以前の学問の体裁を成し、統一的体系としての人間の知識に言及するものであったといえる。例えば、Keats も *Sleep and Poetry* の中で、かつては、天空と地上を視野においた広範な知識の体系を詩が表現してきたが、そうしたことが困難になってきた時代の状況を嘆いている。Keats の歌う知識の体系は “From the clear space of ether, to the small / Breath of new buds unfolding? From the meaning / Of Jove’s large eye-brow, to the tender greening / Of April meadows?” (*Sleep and Poetry* 168-71)であり、これはまさにアリストテレスが示した、月上界と月下界の二つの領域に分かたれた宇宙についての知の体系を継承するものである。すなわち、想像力による詩とは月上界と地上界とを跨ぐ宇宙の哲学であり、Bacon が論じた神と人間とに関する人間の知力による学問の大いなる体系に与するものであったといえる。

### 2. 自然哲学の方法論と想像力による詩の創造性

しかし、キーツが嘆くように、神と人間や自然とが切り離されていない哲学的知識は、19世紀以降、より専門化された狭義の「科学」的知識へと解体されていくことになる。例えば、物語詩 *Lamia* の有名な一節である “Philosophy will clip an Angel’s wings, / Conquer all mysteries by rule an line, / Empty the haunted air, and gnomed mine— / Unweave a rainbow,” (2.234-37) という科学への批判は、自然を理解するために機械のメタファーと数学的概念を援用しながら世界を捉える機械論的哲学への批判であった。興味深いことに、機会論的哲学の揺籃期の17世紀に、Keats と同様に “new Philosophy” について John Donne も “And new Philosophy calls all in doubt, / The Element of fire is quite put out;” (“The First Anniversary: An Anatomy of the World” 205-06) と批判の声を上げた。すなわち、科学革命という近代的な自然学的知の体系が現れる17世紀の Donne の不安も、さらに近代的科学が発展した19世紀初頭の Keats の嘆きも、神や人間個人の手から離れて観察の対象となった自然が、経験的方法という自然科学によって再発見されるも、その脱魔術化された自然は数学的規則に支配される世界であるという批判であった (シェイピン 53)。そこには、機械論的哲学の知識に対し、自然を想像力によって理解し、

人間と自然との結び付きや、社会という人間同士の結び付きを捉えるための包括的知識を説くという詩人らの責務と自負が存在したといえる。

こうした詩人らの弁明は、Philip Sidney の言葉を借りれば、天文学者や数学者、自然哲学者や道徳哲学者らが説く自然の中の秩序、数量、規則、抽象概念といったものに「隷属」(subjection) しない学問が詩であり (“The Defence of Poesy” 216)、詩は「あらゆる学問のうちで」(“of all sciences”)、「王者である」(“the monarch”) (226) とする主張とも共鳴する。Sidney が、哲学者がその方法論的手続きにそって理を説くうえで、詩人よりもより完璧に「教える」ことができることを認めるとしても、“moving” 「心を動かすこと」という点においては、詩人が最上位にくることを述べる (226)。この「心を動かすこと」という、いわば感情の詩学としての詩の本質は、ロマン派の詩においては、天文学、博物誌、自然哲学といった学問の知見を包摂しながら、人間の感覚や感情を基点とし、人間と自然と社会とを取り結ぶ統一的世界像を描くという学問的知識の体系に与することを意味したと考えられる。

### 3. Keats の詩と医科学

しかし、19 世紀初頭のロマン主義の詩にみる sensation の詩学は、16 世紀の Sidney の「心を動かすこと」という感情を表現する詩学からは歴史の変容を見せるといえる。特に、Keats の詩は、近代医学の知識を背景にした、sensation とその感覚的表現を追求したものといえる。Keats は、ロンドンのガイ病院で医学的知見を得たが、ガイ病院の解剖学と生理学の権威であった Astley Cooper の講義は、Keats によって *Anatomical and Physiological Note Book* としてまとめられており、19 世紀初頭における最新の知の体系であった医科学の最前線に Keats がいたことを示している。講義の中で特に、神経組織と脳の機能の仲介を通して、外界からの刺激が身体内部での反応を呼び起こすという、sensation と volition の作用についてまとめた Keats の医学的知識は、詩において、詩的イメージとして変奏されながら、近代的な人間像を織り上げる。特に、Cooper の講義や Keats の医学ノートにおいて、医学用語としての sympathy という語に着目してみれば、sympathy は身体の諸部位が呼応することという意味を含意し (OED)、医科学の最先端の知を担う身体像を説明する重要な意義を担っていた。Cooper の講義録においても、身体器官や身体の様々な部位が互いに呼応することを、“sympathetic communication” と定義している (Lectures 2)。すなわち、sympathy という医学的用語は、身体の各器官が呼応し合う有機的な統一を保持した、全体として機能する身体像を喚起する。Keats の詩においては、この呼応し合う sympathy に基づく身体は、自然という外界からの刺激を受けて、その感覚が神経を通じて脳に伝達され、動きや言葉が生じるという身体と詩の密接な関係を想起させるものとなる。そして、さらに重要なことは、人間の身体が sympathy によって有機的な統一を得るように、動植物や大地という自然のすべてが呼応する世界が Keats の詩で歌われることである。人間の生命が身体全体の調和の中で培われるように、自然も sympathy という内的動因力によって生成されるという世界観が、医科学と詩との intertextuality によって表現される。

しかし、19 世紀以降、sympathy という語は、特に生理学の領域において、次第に神経間の連結、電流、神経繊維の振動といった語句に置き換わり、人間と自然や社会の調和を連想させる 18 世紀当初からの意味合いを失っていった (Forget 304)。その歴史的推移と連動するように、人間に備わった直接的、身体的共感を伴わない世界を構築しようとする自然科学と、sympathy を基軸に自然と社会と人間を包括的に捉えようとする人文学との対立の溝は広がったともいえる。しかし、Keats の詩が織りなす言葉は、医科学と詩の間テクスト性が成立した学問的知識の統一体から生み出されたといえる。ロマン派の詩人らは 19 世紀初期の時代において、こうした知のあり方の重要性について、詩による弁明ならぬ説得を試みたといえるのである。

---

Cooper, Astley. *The Lectures of Sir Astley Cooper, Bart. F. R. S. Surgeon to the King, &c. &c. on the Principles and Practice of Surgery with Additional Notes and Cases*. Edited by Frederick Tyrrell, Vol. 1, London, 1824.

Donne, John. *The Poems of John Donne*. Edited by Herbert J. C. Grierson, 1953.

Forget, Evelyn L. “Evocation of Sympathy: Sympathetic Imagery in Eighteenth-Century Social Theory and Physiology.” *History of Political Economy*, vol. 35, 2003, p. 284.

Keats, John. *The Letters of John Keats, 1814-1821*. Edited by Hyder Edward Rollins, Vol. 1, Harvard UP, 1958.

---. *The Poems of John Keats*. Edited by Jack Stillinger, Harvard UP, 1978.

Sidney, Philip. *Sir Philip Sidney*. Edited by Katherine Duncan-Jones, Oxford UP, 1989.

伊東 俊太郎、「学問の分類について」、『科学基礎論研究』、第 10 巻、1970 年、p.36.

ステイーヴン・シェイピン、川田勝訳、『「科学革命」とは何だったのか』、白水社、1998 年.

フランシス・バーコン、服部英次郎、多田英次訳、『学問の進歩』、岩波書店、1976 年.